

## 解離と分割についての覚書 日常的な解離尺度、空想対話尺度、日常的な分割投影尺度の作成

On Dissociation and Splitting : Normal Dissociation Experiences scale, Fancy Dialogue scale, and Normal Splitting-Projection scale.

中 村 俊 哉  
NAKAMURA Shunya  
福岡教育大学

(平成14年9月10日受理)

### 要約

心が統一されていないという現象については、解離、抑圧、分割（分裂、スプリッティング）などの概念によって説明されてきた。これらは、神経症、境界パーソナリティ構造、自己愛パーソナリティなどを説明し、治療目標を立てる際に有効であった。一方、概念間の相違はあいまいなままであった。これらを歴史的に明確にしつつ、解離と分割の概念の類似を論ずる。本論では解離と分割についての創造的側面、健康な側面について明らかにするとともに「使い分け」とのつながりを示す。そして、日常的な解離尺度、空想対話尺度、日常的な分割投影尺度によって、これらを統計的に表す試みを行う。

Key words dissociation, repression, splitting, fantasy, projective identification, tsukai-wake, N-DES

### はじめに

心が統一されていないという現象は、早くから哲学的、心理学的な考察対象であった。早くはローマ時代末期、アウグスティヌスの告白録において思索されている。彼は、昼間は、キリスト教徒として生きているのに、夜、回心前の異教徒的人格が、夢の中で生き返ることを真剣に問題とした。そして自分は夢の間の第二の人格に責任があるのかという哲学的主題を考察した。エレンベルガー（1970）は、19世紀におけるヒステリー研究や解離研究の流れを詳細にレビューした。19世紀のヨーロッパでは、早くも憑依現象と多重人格現象の関連が指摘されている。エレンベルガー（1970）は、ヨーロッパの無宗教化により、憑依現象が急速に減少し、そのあとに多重人格や解離ヒステリーの事例が増大したと見る。

さて、筆者のところにカウンセリングに来談するクライアントにも、いわゆる転換ヒステリーに類似するような身体化や、過呼吸などの不安発作、記憶の解離、心の中に大きな二つ以上の分割があるような事例がある。そして、日本文化全体としては、憑依の文化が残っている。日本では、青森の恐山、沖縄のユタなどが特に有名である。世界

に目を向けると、霊が降りてくるタイプと、魂が抜け出すタイプとが存在する（中村 1991）が、日本は前者であり、バリ島のバリヤンなども、日本に近いと考えられる。お盆の儀式や、仏壇の前での死者と対話は、日本文化の中の想像力が広い背景を持つことを示している。

このように、心が統一されていないという現象については、多重人格、憑依などとも関連しながら、心理学的概念としては、無意識、解離、抑圧、分割（分裂、スプリッティング）などによって説明されてきた。これらは、神経症、境界パーソナリティ構造、自己愛パーソナリティなどを説明し、治療目標を立てる際に有効であった。一方、これらの概念間の相違はあいまいなままである。分割と解離はどのように違うのか、抑圧と分割はどの程度違うのか、必ずしも明確とはいえない。本稿では特に解離と分割とを歴史的に明確にし、さらに解離と分割についての創造的側面、健康な側面について明らかにすることを目標とする。

なお、筆者は、splittingの訳として、分割を採用する。splittingは、日本では、分裂あるいはスプリッティングと訳される場合もある。日本語のニュアンスからすると、分割は、概念をやや広め

に設定しようとするものである。

本稿のもう一つの目的は、日常的な解離尺度、空想対話尺度、日常的な分割投影尺度によって、これらを統計的に表す試みを行うことである。これまでの境界例尺度 (MCMI-II) や解離尺度 (DES) が、行動面、病理面に着目している限界を乗り越えるための試みである。

## 1 解離と分割の歴史的変遷

### ジャネ、フロイトの解離

ジャネ、フロイトなどが研究したヒステリーの現象は、大きく二つに分けると、解離症状と転換症状である。近年の外傷理論、PTSD理論の中で注目されているのが、ジャネ的な意味での解離 (dissociation) である。しかし、ジャネの原典を当たった研究は少なく、その元々の意味が十分理解されているとは言い難い。

ジャネは、19世紀後半から20世紀初頭の卓越した心理学者であり、精神科医であった。その1989年の著書 *L'automatisme psychologique* *Essai de psychologie expérimentale sur les formes inférieures de l'activité humaine* 「心的自動症」において、ヒステリーの症状を示す症例を取り上げ、意識下固定観念：subconscious fixed ideasを暗示によって修正してゆく、きわめて実践的な方法を示した。そして、ヒステリーは、一時的な緊張の低下をきたす一群とし、意識が統合できなくなることで、そこからはずれた心的機能が意識とは離れて活動すると考えた。これを表す用語が、フランス語で *désagrégation* である。これをWジェームスが *dissociation* と英訳して用い、ジャネ自身もこれを使うようになった。これが現在解離と訳されている概念の始まりである。筆者の手元にある1910年の *Les Névrose* では、すでに *dissociation* が使われている。この他、彼は神経性多食症の臨床的記載を最初に行い、心理療法における転移の理論を最初に明確に述べたと評価されている (パトナム)。現代においては、ラドウィグ (1983) が *dissociation* の機能を再定義した。

ジャネは、健忘、遁走、継時的複数存在 (successive existences、交代人格)、転換症状などは、人格の切り離された部分でありながら独立して機能し発達しようとする (意識下固定観念) 存在によるものであると考えた。ジャネは解離に関する理論をそれ以上に拡張して心のモデルまでを作ろうとはしなかった。彼は自分の観察を注意深

く記録し、その結果を控えめに解釈する、温和で思慮深い人物であって、ヒステリー現象と催眠現象の説明にとどまり、それ以外の型の人格の性質や、精神病理を解明しようとはしなかったという評価がされている (パトナム1989)。

プロイエルとフロイトは、同じものを二重意識 *Doppelbewusstsein* と呼んで、催眠による意識の変性状態と類似すると考えていた。ここでジャネは、解離の能力、催眠トランスの能力は、心的脆弱性、被暗示性の存在が関連するとしている。一方、プロイエル、フロイトは、ヒステリーや変性意識状態は、「最高に明晰な知性、最高に強力な意志、最高に偉大な性格、最高の批判力の持ち主にも見られる」とする (ハーマンp11)。

ジャネの理論は、その後1910年代から長く埋もれることになる。ジャネ批判としては、ラカン (1932) の妄想の現象が説明されていないという批判がみられる。ジャネは、フロイトの初期の考えを自分の考えの模倣と広言し、必ずしもフロイトを十分理解していなかったと考えられている (村上、荻野1965)。そして1970年代後期に始まる解離への関心の中で、ジャネが再び脚光を浴びることとなった。ここでは、ジャネの理論は外傷理論と結びついて、被害者性と外発性を強調する役割を取っているように思われる。しかし、ジャネの原典を見る限り、外傷の外発性のみが強調されているのではなく、外傷 (生活史上の体験) からくる無意識の (意識下の) 固定観念を変容させてゆこうとする治療がみられるのであり、ファンタジーの変容を催眠によって試みていると言っても良いくらいである。

### 類型学的モデルと連続体モデル

解離の積極性を強調するパトナムらによると、解離は適応と防衛の目的を担当している。例として、行動の自動化、労力の節約と能率向上、融和しえない葛藤の解消、現実の制約からの逃避、破局的体験の隔離、感情のカタルシスの排泄、集団感覚の強化を挙げた。痛みを感じないこと (痛覚脱失) と自己からの離脱を含む機能もある。

解離には類型学的モデルと、連続体モデルが存在する (Putnam 1997 p82)。ピエール・ジャネ (1930) は、病的解離者は正常人とは根本的に異なるという立場で、前者である。素質的脆弱性、被暗示性、強烈な感情の事件がこの傾向性を作るとする。一方、ウィリアム・ジェームズとモートン・プリンス (1927) は解離をひとつの連続体と考え、没頭のような些細な正常現象から、遁走、

多重人格性障害などの病的状態まで、切れ目なく続いているとしている。これらを支持する証拠として、催眠感受性の分布カーブと、解離体験尺度DESの分布が連続的であることがある（パトナム1989）。

### 解離の防衛機能

パトナムは、解離の防衛機能を3つのカテゴリーに分ける。1) 行動の自動化、2) 情報と感情の水密区画化 (compartmentalization)、3) 同一性の変更に自己からの疎外。この行動の自動化の中のA正常な自動化は、例えば注意を二つ以上の意識の流れに分割できる心の能力である。車を運転しながら会話したり、将来の活動の計画を立てられるなど。構造化面接によって「正常」とされた100人のうち、約20%が運転中起こったことを思い出せないとこたえている（DESの項目1）。この他、電話中の落書き、楽器を弾くなどがある。ただし、実験室では、並行して行う作業間には干渉が起こる。また、水密区画化 (compartmentalization) では、意識と記憶の多くの領域を相互に多から切り離す。状態依存的学習・記憶再生と関連する。例えば、職場のことは家では一切忘れるなどがある。この機制により、親に非道処遇をうけていると分かっているながら、親を理想化することもできる。単一の自己について、異なった多くの見方を持つことを許容する。

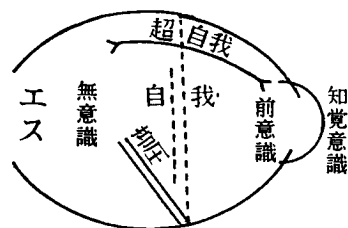
パトナムは、「正常な解離」ということばで、「不適応的な反応との連合がいつさい存在しない解離」とし、「病的解離」を「DSMの解離性障害を含めて不適応を増大させる解離」と定義する。

アーネスト・ヒルガードのような催眠研究家の定義は、解離とは「意識の特殊な一形式であって、通常ならば連携しているはずの事象が相互に離散しているもの」である。情報処理モデルのルイス・ジョリオン・ウェストの定義は、「情報の流入、貯蔵、放出を、その通常の（あるいはそうあるべき）連動関係から能動的に離脱させようとする精神生理学的過程」である。

### フロイトの抑圧

抑圧Verdrängungは抑圧より排除と訳したほうがドイツ語の意味に近いという（土居、鈴木、中野）。独和大辞典（小学館）によると、ある場所自体を占めるため誰かをその場所から押しのけることである。ベッテルハイムは、Verdrängungを英語のrepressionと訳すべきではないという。吉田(2002)によると、ネイティブのオーストリ

ア人に聴くと、このVerdrängungという言葉は、100人のデモ隊を排除するという場面で使う場合、すべて排除するというよりも、5人ぐらい残して排除するような意味であるという。このことは、フロイトの1933年の図式の解釈を明確にする。抑圧されたもの（Verdrängt）とある二本の実線は、無意識の中に半ば沈みかけながら、一部を意識のそばに残しているという図であると解釈できる。



岡野(1995)によると、抑圧が主体により積極的に用いられる機制であるのに対して、解離は主体が外傷体験に翻弄された結果、受身的に陥る状態である。

### 事例からみた解離と抑圧

筆者は、解離性同一性障害とされる事例を見聞きすることが増えているが、これらの診断が形式的になってきていると感じている。多くの医師は、DSM4に基づいて、外的行動から診断を下す。しかし、そこには多くの質の異なる水準が含まれている。ある中学2年の女子の事例では、母親に暴力を振ったときの記憶というものがない。部分的な健忘である。また、空想上の友だちが数人おり、幻視のような症状を示したこともある（大住2002）。しかし、カウンセリングのテーマは、3者関係の葛藤であることがよく見られる。筆者は、思春期の示す、機能としての解離現象があり、全体の水準は神経症水準であることがしばしばあると思う。カウンセラーは、これらのアセスメントをしておく必要がある。定義から言っても、健忘は解離の中でも一番抑圧に近い。なぜなら、すぐに切り替わらず、ちょっとしたことで数分、全生活史健忘では数年以上、無意識に沈んでしまうものだからである。これ以外に、境界例水準の解離性同一障害は、もっとも多く見られようし、精神病水準の解離性同一障害もみられる。

### 広い意味の解離の要因

近年解離の要因として、外傷が目され、ジャ

ネ、フロイトの初期の考えが復活しているといえる。これらの発生する状況を振り返ると、菊池(2002)の例のように、Aが親から激しくしかられているときに、このしかられている自分は別の人物Bであるという風に分離する。こうしてBという自分の嫌な部分を体現する交代人格が内的に成立する。これらの治癒機転としては、セラピストの前で、これらが交流をはじめ、Aのなかに統合されていくことである。

激しい継続的な虐待、外傷のない場合の解離は、この機転の内的な分割としての重要な側面を明らかにするだろう。例としては、門限が厳しい女子学生が、次第に友だちと示し合わせて、友達のうちにいるという口裏合わせを始め、男性と旅行にいったり始めるような例がある。親が、彼女の心を見ず、門限、時間などの外的な枠組みしか見なかったことが、二つの人格の使い分け、つまり親の前の自分と、外の自分の解離(分割)の要因となったわけである。もちろん、これは完全な解離ではない。使い分けである。同じように、完全に解離(分割)されていなくとも、自分の中に二つの部分がある(厳しい部分と自由な部分など)という人は多いが、カウンセリングの経過の中で二つの部分が交流することは変わらない。

坪井(2002)によると、ネグレクトされてきた少女が、これまでいやだったこととして「お母さんがご飯を作ってくれなかった」ことをあげるが、「べつによい。寝ればいいんだよ。忘れられるから」と言ったという。つまり、寝ることは、解離することと目的論的には同じである。嫌なことを避け、自分を守ることができる。これは、不登校の生徒が、昼夜逆転して夜中に起きていることに似ている。なるべく嫌なものと接しないで生きるすべといえよう。ハーマン(p69)によると、内発的に解離を成し遂げることができない人たちは、アルコールや麻薬類を使ってそれに似た感覚麻痺状態を作り出そうとすることがある。リフトンは、心的麻痺状態が、戦争、災害の後を生きる者に普遍的とし、マインドの麻痺(paralysis of mind)とたとえた。

### 広い意味の解離と使い分けの創造性

解離、あるいは使い分けをする人は、なぜか魅力的であり、面白みがある。ペンネームで活躍する人などが上げられる。筆者が解離の創造性を主張するのは、解離(分割)では、まったく違う自分になって、そこで知識や経験を増やせるという、そのプロセスからである。ある意味では as if 人

格である。しかし、それが、自分に戻って何らかの相互作用で取り込まれることがプロセスとするとするならば、創造的であろう。これは、メラニー・クライン的な意味での投影同一化が、外の人になりきって、取り入れるのと似ている。その運動に注目したのが投影同一化の概念である。一方で解離(分割)は、あくまでも内的な現象に注目したものである。このように積極的な面を見ると、解離は防衛とか解体とは言えないのではないか。なお、交代人格が徐々に統合してくると、むなしさ、空虚感、一人になったつまらなさを感じ、多くはついには多重人格や健忘を再現するようである。これは、クラインの抑うつポジションとも関連するだろう。この抑うつに耐えられないとき、分割(分裂的妄想的ポジション)を再現せざるを得ないのである。

### 解離と使い分けの要因としての多文化状況

適応的に解離をする人が魅力的であると述べた。広い意味のそれは、例えば思春期の若者が、親に黙って外の世界を作るようなものである。秘密を持つこと、その体系をうまく分離させる力である。狭い意味の解離の要因として、外傷や継続的葛藤状況が取り上げられるのはもつともであるが、それのみでなく使い分けや多文化状況があると考ええる。

香港人のように、場面によって名前の使い分けをする人々がいる。英語名をつけて、友人同士で使う一方、日常生活で広東読み中国名を使い、北京から来た人の前では北京読み中国名を使う。名前の使い分け現象については中村(2000, 2002)が取り上げて分析したが、国際学会においてとくに欧米人からの反響があった。また、日本文化では場面ごとに、私、僕、俺、お父さん、先生などと自称を使い分ける現象は良く知られている(北山2002, 舩田, 中村 印刷中)。解離、使い分けが文化によっては容認されているといえまいか。

### 解離にみる空想力

解離現象は病的なものだけではなく、文化的には臨死体験における体外離脱体験、宗教的トランス状態など文化的に存在してきたのみならず、すでに見たように健忘などにおける合目的論的な意味合い(つまり、思い出したくないことを忘れることができるという合目的性)や、運転中に他のことを考えられるといった効率性が指摘できる。連続モデルに見るように軽度の解離は、多くの人

が日常的にしばしば使っていると言える。そして、さらに解離が、空想力の源泉であるという発想の逆転をすることができると筆者は考える。

解離と空想力についての関係を見たものとしては、空想傾性 (fantasy proneness) の研究である。空想傾性は、ウィルソンとバーバー(1983)によると、「時間の多くを、自分で作り上げた世界(イメージと創造と空想の世界)の中で生きる」人の特徴である。これを病的解離と関連させたのは、リンほか(1988)である。

しかし、これらを逆転させる発想が必要ではないだろうか。解離 (分割) は空想力の源泉であり、幸福感の源泉となりうる。退行を悪い意味で使っていた時代にバリントは、退行には健康な側面があり、柔軟性の源泉だと考え、転換させた。分割を悪いものと見ていた時代に。ピオンは分割、投影同一化は共感力とコミュニケーションの源泉であると、発想を転換させた (後述)。さて、筆者が括弧書きで解離 (分割) と書いている以上、分割についての理論の変遷を振り返る必要がある。

### フロイトの意識分割

フロイト (1894) は、当初、意識分割 (Bewusstseinsspaltung) という言葉で、ヒステリーや催眠における人格の交代的重複を説明していた。その後、フロイトは無意識と抑圧 (Verdrängung) の理論で多くの心的事象は理解され、分裂 (分割) のようなものを使わなくてもすむと考えた。しかし、1938年、彼は精神病とフェティシズムにおける自我の分裂 (分割) Ichspaltungや否認の現象について記載し、男性フェティシズム患者の、女性のペニスの存在に対する二つの態度が、交互に影響しあう事なく別々に一生持続している例をあげる。

### メラニー・クラインの分割

クラインは、子供との仕事を通じてかなり早くから分裂 (分割) の多様な形に直面していた (Hinshelwood 1989)。以下にクライン以来の様々の分裂 (分割) の形式をあげる。

#### 1) 対象の分裂 (分割)

クラインは、初期には対象に関しての分割に関心を集中させている。最早期の幼児は、対象は不自然によい性質を持っていたり、悪い性質を持っていたりする (よい対象・悪い対象)。乳房は「良い、満足を与える」乳房と「悪い、欲求不満を引き起こす」乳房とに分割される事を示した (部分

対象)。分裂 (分割) は、対象が<sup>3</sup>、そのよい側面と悪い側面に分かれるようになる過程を示す用語であった。

この分かれた対象の現実的統合がその後の抑うつ態勢へむかう課題となる。良い対象の内化は、この能力を高める (クライン1955)。クラインは、破壊衝動の現れである過度の羨望Envyは、最初の「良い・悪い」の分割を妨げ、良い対象を作り上げる事を十分に遂行できないようにしてしまうとする (1957)。

#### 2) 自我の分裂 (分割)

フロイト (1921) は自我の分化を、主に失われた対象との同一化によって起こるとする。これは後の自我、超自我の分割 (division) の基礎である。さらに、対象同一化の交代によって自我が引き裂かれると言う記載もある (1923)。アブラハムAbraham,K.とクラインはフロイト (1917) の影響で、取り入れと、内的な新しい対象と自我の部分との同一化の結果、自我の成長がおこるとする。クラインは、1946年以降、自我の分裂 (分割) に関心を示すようになり、投影的侵入で対象の中に悪い自己の側面を分割 (splitting-off of aspects of the self) して排出する事を記述する (投影同一化)。ちなみに、クライン派では自我と自己は別の概念ではない。注1

投影同一化は、自己の一部の分裂 (分割) と、その他者の中への投影との結合を含んでいる (クライン1955)。クライン(1946)は「自我は、自我のなかで起こる付随する分割なしに、対象を分割する事は出来ない」としている。羨望に満ちた破壊的な衝動が強く分裂排除されている場合、これの意識化は大きな困難となる。恐れられている自己の一部を次第に意識できるようになると、統合が生じ、責任、抑うつ感が体験されるようになる。

#### 3) 断片化

クラインは40年代に分裂病の思考の多重な分割の状態像に接していた。彼女は、対象の分割があると自己を断片化する結果となるとしている。これは破壊の不安を呼ぶとする。これは、ピオンの思考の連結 (linking) への (on) 攻撃 (attacks) につながる。分裂病では、きれいな良い悪いの分割ではなく、多重な分割が起こるとされる。これは、恐怖の対象をバラバラに断片化するためにする攻撃の裏返しである。

クラインは、早期防衛機制は、神経症的防衛機制の概念では置き換えられないものであり、その下にあるものであるとし、自己の部分の分裂 (分

割)は、のちに意識と無意識の分割(抑圧)の基礎ともなるとする。抑圧においては自己の部分の分裂(分割)ほど解体に身をさらす事なく、もっぱら意識と無意識の区分けの分割となる(Hinshelwood)。初期の分裂(分割)機制と不安が克服されていないと、抑圧も硬直したものとなってしまう(クライン1952)。分裂(分割)の機制は、投影同一化とともに、カーンバーグの境界性人格構造(borderline personality organization)を区別するポイントとなっている。

二つの違う視点を持ち続けるということでは、サンタのおじさんが父親だと知っていてしかもサンタに興奮し感謝する子供も、似た分割的態度といえる(Hinshelwood)。

### メラニー・クラインの投影同一化

投影同一化は、1946年クラインによって、攻撃的、排出的対象関係の原型として定義された。それは、自我(自己)の部分(parts)を対象の中に(into)押しやり、その対象の内容を引き継ぎ(take over)、対象をコントロールしようという意図を持つもので、幻想(空想)phantasyであるとともに、心的操作である。その幻想(空想)には自己のある側面が、他のどこかに位置するという信念が含まれている。(Hinshelwood 1989)。

早くからクラインは自己(self)や、衝動の一部が外の世界にあるという信念についての記述をしている(1927)。しかし、1946年および1952年になって初めてそれを理論的に位置づける事となった(クライン, M 「分裂的機制についての覚え書き」)。彼女は、投げ入れる内的対象とともに自我、自己(クライニアンにとってこの2つは重なる概念)の一部(たとえば憎しみや愛情)と一緒に排出されると考える。

投影同一化の目的は、様々な不安や衝動を分割排除して身をかかわすこと(悪い内的世界から良い部分を保護し維持すること)、自己や自己の一部を投影して対象を支配することにより対象と分離しているという印象を回避すること、対象の能力を乗っ取り自分のものとする、対象を攻撃し破壊することなどである。

クラインは、1957年、羨望(envy)が投影同一化の中に深く含まれているとした。それは、最高の属性を破壊するために、あるいは受け継ぐために、他人の中に無理矢理入り込む事を表している。クライン(1955)は、主人公フェビアンが他者と次々入れ替わる小説において、貪欲(greed)や羨望が、他者を所有すること、つま

り投影同一化へ向かわせ、そして結局は他者を取り入れたとした。たとえば、給仕に変身しようとするフェビアンは、母親の中に侵入して奪い取り、もっとミルクと満足を得たいという欲望の再現と解釈された。

このように、クラインにおいては、投影同一化は空想の側面が強い。

### ビオンの分割と投影同一化

ビオン(1959)は、生後数カ月にこの機制が用いられるが、正常に機能する投影同一化は、象徴形成及びコミュニケーションの主要な因子になるとし、正常な投影同一化normal projective identificationと、病的abnormalなそれとを区分した。他人の立場に身をおくことにより、他人の感情をよりよく理解できるようになり、対象との間に共感という関係が作り出される。クラインは自我の発達には、取り入れと投影の繰り返しによるという。ビオンは、これを投影同一化と取り入れ同一化introjective identificationの繰り返しによると明確にしている。よいものが投影され、取り入れられることは、自我やよい対象関係を増強していく。

ビオンは、乳児が母親(容器;container)の中に(into)破壊的な内容(contained)を排除(expel)しても、それを解毒、中和し、乳児が再取り入れできるように取り計らうという「内容容器モデル」を提出した。幼児には耐えがたい衝動や自己の一部や不安は、母親の中に投影されるが、母親はそれを包み込んだり、振る舞いによって緩和する対応ができる。ビオンはある種の精神病や羨望の優勢な精神病的パーソナリティによって、病的投影同一化が用いられるとする。この場合、自我の様々な部分が著しく分裂(分割)し、対象の中に、あるいは無限の空間に荒々しく投影される。これらは、容器により解毒されず、奇怪な対象bizarre objectに囲まれてしまう。

### オグデンらの分割と投影同一化

クライニアンによりさらに投影同一化の概念の理解は発展した。受取手への喚起性をめぐっては、論者によって考えが多少異なる。オグデンOgdenは投影同一化は一群の空想fantasyとそれに付随する三つの段階からなるものとする。

1. 自己の一部分を他者の中に投げ入れる空想。
2. 对人的なやりとりを通して、投影の受け手に、投影するものと一致する感情を経験するような圧力が加わる。

3. 受け手がその投影に心理的改変をした後、再度送り手は内在化internalizationする (Ogden 1979)。

投影同一化を治療関係に見いだす事もできる。投影同一化は、治療者の逆転移のなかで、部分を演じているかのような、操作されたような主観的体験を起こす (ピオン1961)。ハイマン (1950) は、患者の理解のために、これらの逆転移感情を用いることができるとした。

歴史的に見ると、投影と投影同一化の区別は論者によって微妙に異なっている。クライン自身は、投影を心的機制、投影同一化を、それをあらわしている特有な空想と考えた (スピリウス) が、その後のクライン派は、そのようには考えない。一般に、投影同一化は、フロイトの投影に、以下の深みを付加したと考えられている。それは、自我 (自己) の部分の投影をとみなわずに衝動を投影することはない事、それには分割を含み、その衝動や自己の一部は消滅しない事などである。他方、この点を長らく論争しているマイスナー (Meissner, W, 1980) は、投影同一化の用語を、混同を避けるために、自我が未分化な精神病的機制に限って使うべきであるとしている (マイスナー「投影同一化についての覚書」山木・満岡・伊藤 小此木啓吾監訳)。

用語については、メルツァーは、このように意識から離れている幻想 (投影同一化) を表現する言葉が「もし見つかったとすると、結局は侵入的同一化 (intrusive identification) のような言葉になるだろう」とする。同一化という用語は取り入れよりも高次の内在化 (internalization) であることから、フロッシュは、投影同一化を、投影性取り入れ (projective introjection) と呼ぶべきとする。

### 分割と抑圧

分割と抑圧 (排除) の関係は、クラインが分割をより原初的メカニズムとしたように、抑圧は分割よりも成熟した防衛メカニズムであるとする考えが一般的である。これはクライン自身がフロイト理論との整合性から述べているし、カーンバークは、分割が使われるか抑圧が使われるかを性格病理の重篤さの識別に採用している。しかし、スィーガル (1962) は、抑圧の病理はスプリッティングに基づいているとして、分割に重点を移している。実際の治療場面においては、治療者の寄って立つ理論によって、その現象が抑圧、分割と使い分けられているのが現状である。

ウィニコット (1966) は、ある男性の分析における、非男性的な要素を、完全な解離があるとして論じた。この症例で解離が生じたのは、破綻が生じかけていたときのことだったとする。同時に、10%の解離された部分では、自分が男子であることが分かっていたとする。北山 (2002) によると、スプリッティング (分割) と解離をウィニコットは程度の違いと考えているという。

### ユングの影・アニマ概念と分割

ユング (1929) は、意識と無意識の間の「分割」の方に力点を置いている。その中でも影の概念は、早期に自分の概念から分割排除されたものであると考えている。幼いころのしつけを経て、自分の属性ではないとして排除されたもの、自我が受け入れなくなったものが影である。それは、外的に投影されていることもあるし、内的に夢の中で補償作用をもたらすこともある。例えば、温和な紳士的な人の影として、暴力的な人が出てくる。さらに深いところに、最早期に分割排除されたものとして、異性の属性がある。男性なら女性的な属性は、より早く排除されて、外的に投影されるか、内的にアニマとして補償作用をもたらす。心理療法のプロセスは、これらの排除した自分を、「自己」が受け入れてゆく方向でなされているといえよう。ユングのこれらの分割は、投影される分割である。

### 水平分割と垂直分割

コフートは、自己の分析 (1971) で自己愛パーソナリティ障害の患者を二群に分け、水平分割と垂直分割をキー概念として論じる。第一グループは、自己愛欠乏の人たちで、心の深い水準で太古的な誇大自己を抑圧しており、これが水平分割である。第二のグループは、誇大自己は垂直分割により、心の現実的な区域から排除、否認されている一方、心の隠された深いところで水平分割も見られるとする。

つまりコフートにおいては、抑圧が水平分割、スプリッティングが垂直分割に相当する。そもそもフロイトの二分法は、意識 (後の自我と超自我の意識部分) が一方であり、もう一方に無意識 (後のイドおよび自我と超自我の無意識部分) があるが、コフートはそのような分け方は時代状況と関係したとする。

「その探求からフロイトが二分された心 (サイキ) という定式、そしてその後の構造葛藤という定式へといたった、あの世紀末の患者のパーソナ

リティ構造と対比してみても、われわれの時代の優勢なパーソナリティ組織は、抑圧によってもたらされる単純な水平分割によっては代表されないのである。現代人の心は「カフカ、ブルースト、ジョイスによって描写された心は「衰弱し、多数の断片となり（垂直分割し）、そして不調和となっている」（コフート1984, p88-89）。

### プロイラーの分裂概念と解離

ジャネが精神衰弱（psychasthénie）における基本障害として心的緊張低下をとりだしたように、プロイラーは分裂病（統合失調症）の一次症状は観念連合（Assoziation）の弛緩であり、夢や白昼夢に類似していると考え、二次症状は豊富な変種すべて、各種心的機能の分裂（Spaltungen）、例えば感情と知性の分裂や感情と意思の分裂によって発生すると考えた。自閉、つまり現実との接触喪失は、「解離」の二次的な結果であるとプロイラー自身は考えていた。エレンベルガーは、プロイラーのこれらの考えはシュレーゲルの説と類似しているとする。シュレーゲルは、「人間は神、自然、宇宙との交流を絶たれているが、それは人間が自己の内部で理性と意思と空想とに分裂しているからであり、人間の内部に調和を再建することが哲学の任務である」とする（p334）。プロイラーの意味での分割は、解離と近い概念といえるのである。

### 二重思考（Double Think）

ハーマン（p132）によると、監禁状態の人は、変性意識の曲芸をたくみに行う人となる。解離、意志による思考の抑制、極端な過小評価、時には完全否認によって、彼らは耐え難い現実を改変する術を身につける。通常の心理学用語には、同時に意識的でも無意識的でもあるこの複雑な心理操作に対する名称はない。おそらくこれに対する最も適切な名は、ダブルシンク（二重思考）であろう。ジョージ・オーウェルの定義によれば、「Double thinkとは、ひとつのマインドの中に、同時に二つの相矛盾する信念を保持し、双方を受容する力を意味する。当人はおのれの記憶をどの方向に変えねばならないかを知っている。この能力は、トランス状態の特性のひとつ、認知の変化を起こす能力がある。捕囚となっている人は、相互にこの状態の誘発法を教授し合う。それは、歌や祈りや、簡単な催眠術による誘発法である。これらの方法を意識的に用いることで、飢えや寒さや苦痛に耐えようとする。

ジャネの説を大幅に取り入れ投げ返したジェームズは、Divided Mind（分裂した心）という概念を用い、多少の分割は正常であると認める。

### 解離と分割

このように、解離もスプリットティング（狭い目の分割）も心を分割させることに変わらないが、その現れ方が、前者が自分の内部での分割を主とし、後者が、対象の分割と自己の分割を同時に引き起こす点が異なるといえよう。また、ピオンが後者に述べたような、対象に分割した悪い自己を投げ入れ、それを容器としての対象（母親、セラピスト）が解毒、消化してよいものとして投げ返すというプロセスが想定できる。そのような積極的なプロセスとして、スプリットティングを見ることができる。同じように、内的分割としてのいわゆる解離は、これまで言われてきたような外発的（外傷による）なものという理解は不十分である。解離は、自分の世界を広げてゆくプロセスとしてみることができる。解離は機能として、プロセスとしてある。もちろん、重症の不応に陥る解離症状には、継続的な虐待、外傷、長期的苦痛が存在する。一方で軽度なもの、例えばエディプス水準の神経症圏といえるような解離症状も見られる。心理療法の経過でこれらの症状は大いに変化が見られ、成功することも多いと思われる。

最も積極的な、健康な解離（内的分割）は、健康な意味での多重人格、つまり場面によって自分を区分けする現象である。

### 解離における取り入れ（引き戻し）

ある集団の中では、別の人格として活躍し、違う集団の中では、それからうまく切り離して、感情も認知も保つということにより、その世界での新しい体験が広がる。さらにそれを自分に引き戻すことがあれば、もともと的人格が成長し、広がるというプロセスがあろう。

筆者は、この例として吉田(2002)の全生活史健忘の事例を挙げることができる。この事例は社会的知識や一般知識はすべて残っているのに、自分の名前、生年月日、自分の歴史、家族などをまったく思い出せなくなる。そして7年後に、一気に再生する。彼は、この間、リーダーシップをとり、すばらしい絵画を描き、芸術を鑑賞するゆとりある人生をもち、仕事も熱心にする人間になっている。しかし、この解離の前の人生は、あとから分かったことだが、これらとはまったく違う、苦痛に満ちたものであった。これらの新しい可能

性が開花したことは、すでに as if 人格とは言いがたい。しかし、記憶が戻り、統合された後、芸術的センスが取り入れられるか、やはり平凡な生活に戻ってしまうかはケースによると思われる。

### 境界例尺度

井沢、大野、浅井、小此木(1995)は、Millon(1987)によるミロン臨床多軸目録Millon Clinical Multiaxial Inventory(MCMI-II)境界性スケールを取り上げ、項目分析を行い、短縮版を作成している。その17項目版に、スプリッティング(分割)に相当する項目は少ないが、強いて言えば「61 崇拝していた人に後で失望することが多い」「56両親の意見はいつも食い違っていた」がこれに相当する。井沢(1997)は、MCMI-II境界性17項目版の統計的検討を行い、 $\alpha$ 係数は.79であり、4因子構造であるとしているが、ここにはスプリッティング機制を示す因子はない。

### 解離尺度

解離体験尺度(DES: Dissociative Experiences Scale)は、正常から病的にいたる幅広い体験をひとつの連続体とするものである。パトナム(p93)によると、集団としては、PTSD患者は、解離尺度の得点が高く、DESの平均が30であるが、正常人の平均は10、多重人格障害は44である。しかし、PTSD患者の集団のDES分布を検討すると、平均17の患者群と、平均44の患者群とのほぼ半分ずつに分かれるという。解離水準の高い多重人格性障害患者は、DES得点の低いものより、自殺企図と自己損傷が結びに多いとされる(Shearer, S. L. 1994)。

1985年以降、解離が操作的に測定されるようになると、DESのデータの分布は、二つ以上の独立した類型を仮定したほうが良いと考えられるようになり、ニルス・ウォーラーら(1996)は、タクソンの統計分析により、類型モデルが臨床水準の集団には良くあてはまるとする。ここから、DES-Tという病的解離者のサブスケールが生み出されるのであるが、これはパトナムの本のp85に載せられている。これらは、明らかに病的な解離を示している。この点のパトナムの解釈は魅力的である。光の現象を、波動論と粒子論が同時に説明できるように、連続体モデルと類型モデルは、ともに解離の現象を説明しているというのである。

### 解離指標

ロールシャッハの領域では、多くのDID指標が考案されているが、現在進行中の研究といえよう。その中でも、Wagner指標(1983)が最も優れているとされる。複数回のロールシャッハで、交代人格が異なることも見られる(菊池2002)。しかし、現在要注意とされるのは、ロールシャッハを施行すること自体が刺激となり、フラッシュバック的な反応や解離を引き起こすことが見られるということである。試行直後に、自分が誰で、ここがどこかが分からなくなるケースがあるとの報告がある。これらの特徴は、DIDに限らず、性的な被害者の示ししやすいことだとされる。

## 2 日常的な解離、空想対話と日常的分割投影の尺度構成

### 目的

日常的な健康な解離、空想対話、分割投影の現象を尺度化する。

### 方法

2002年7月、質問紙を集団法で実施し、回収した。対象は大学生183名。

これらのうち、内容と相関から項目を選択した。なお、解離、分割という特性を考え、項目分析において通過率の低いものものなるべく取り入れるようにした。

### 健康な解離尺度

これらは、日常的な健忘、自動化、身体化、使い分けなどの項目である。5件法による16項目による尺度を構成し、ある程度高い信頼係数.79が得られた。平均は43.9、標準偏差は9.86であった。簡略版は、内容と相関から6項目で作成した。平均は17.1、標準偏差は4.62である。

表1

日常的な解離尺度	16項目版	$\alpha = .785$	平均値	全体との 相 関	削除した 時の $\alpha$
4	ゲームをしているときはいつもと違う性格になる		2.3	.35	.78
7	テレビを見たりゲームで遊んだりし終えると、その間 周りで何が起こっていたのか分からない		2.6	.46	.77
17	他の人が難しい話をしているとき、上の空で聞いている ことがある		3.5	.49	.76
23	友だちや教師や他の大切な人々の名前をど忘れしてい ことがある		3.1	.41	.77
26	たった今会ってしゃべったばかりの人の服装や髪型を まったく覚えていない		2.5	.44	.77
28	寝てもいないのにうっかり電車を降り忘れ、次の駅に 行くことがある		1.8	.37	.78
29	傘や荷物をどこかに忘れることがある		3.4	.36	.78
30	職場、学校の住所を書く欄に、自宅の住所をいつのま にか書いてしまったことがある		2.5	.43	.77
34	車を運転したり電車に乗っているとき、途中の経路を 全く意識しないうちに到着することがある		3.3	.40	.77
36	本当の自分は今のような性格ではない		2.8	.33	.78
38	今までとは違う別の自分になってみたいという願望を 持っている		3.8	.38	.77
44	先週言ったことと反対のことを言うことがある		2.7	.40	.77
114	身内にはわがままだが、外では好人物で通っている (共)		2.7	.34	.78
45	場面により自分の名前を使い分ける		2.1	.26	.78
51	大事な行事の時に、腹痛や熱で休むことがある		2.1	.25	.78
52	大事なものを、うっかり手が滑って落としてしまうこ とがある		2.8	.43	.78

表2

日常的な解離尺度短縮6項目版	$\alpha = .66$	全体との相関	削除したときの $\alpha$
4	ゲームをしているときはいつもと違う性格になる	.43	.65
7	テレビを見たりゲームで遊んだりし終えると、そ の間周りで何が起こっていたのか分からない	.45	.64
17	他の人が難しい話をしているとき、上の空で聞い ていることがある	.38	.66
26	たった今会ってしゃべったばかりの人の服装や髪 型をまったく覚えていない	.28	.68
34	車を運転したり電車に乗っているとき、途中の経 路を全く意識しないうちに到着することがある	.26	.68
52	大事なものを、うっかり手が滑って落としてしま うことがある	.36	.66

### 空想対話尺度

健康な空想対話尺度は、空想上の対話やぬいぐ  
るみ遊びの項目を選んだ。項目数が4と少ないに

もかわらず、一定程度の信頼性係数を得られた  
といえよう。平均は7.72で、標準偏差は3.27で  
あった。

表3

空想対話尺度	4項目版	$\alpha = .670$	平均値	全体との 相 関	削除した 時の $\alpha$
8	私はよくぬいぐるみに心ひかれ友達のように扱う		2.0	.54	.54
9	大人になってからも人形やぬいぐるみを手にし、人形 になりきって他の人との会話を楽しめる		1.6	.62	.52
11	遠方にいる友人や恋人に、心の中で話しかける		1.9	.34	.68
16	何かする時、頭の中でもう一人の自分と話して決める		2.1	.37	.67

### 日常的な分割投影尺度

この尺度では、自分の中での分割、対象の分割、そして分割投影（投影同一化）の現象の中から、日常的なものを選んだ。項目分析において通過率の低かった項目も残す方針で選択を行った。5件

法で17項目の尺度を構成し、信頼性係数は.74と、ある程度高いものが得られた。平均は47.3、標準偏差は8.71であった。簡略版は、内容と相関から8項目で作成した。平均は21.7、標準偏差は5.17であった。

表4

日常的な分割投影尺度 17項目  $\alpha = .744$

	平均値	全体との相関	削除した時の $\alpha$
114 身内にはわがままだが、外では好人物で通っている	2.6	.46	.72
119 人前では見せかけの自分を作ってしまう	3.4	.38	.73
5 小説を読んでいるとき自分が主人公になりきる	3.1	.18	.75
41 ある人の居ない所で悪口を言っている、その人の前では肯定的に振る舞う	3.1	.35	.73
44 先週言ったことと反対のことを言うことがある	2.7	.37	.73
47 家の外と内とは、見せている性格が違う	3.0	.41	.72
55 ある異性をはじめ理想化していて、その後しばらくすると幻滅することがしばしば	3.2	.42	.72
56 親に対してある時は甘え、別の時には攻撃的になる	3.3	.36	.73
58 ある将来こういう仕事をしたいと言っている、別の時は違う仕事をしたいと言っている	2.7	.38	.73
59 自分の母親は優しくいい人のときもある、恐くて嫌な人になるときもある	3.0	.28	.74
60 一つの集団だけで活動せず、複数の集団に属して活動している	3.1	.17	.75
61 集団の中で、自分に合う人と合わない人が分けられる	3.8	.23	.74
62 よい人と思っていた友人の内面に、自分への敵意があると気づいて距離をとることがある	3.4	.24	.74
63 悪いことは人のせいにしてがちである	2.8	.36	.73
64 一人だけでなく、複数の異性に関心をむける	3.0	.41	.72
68 ある人のようになりたいたいと思って、その人になりきってみることがある	2.5	.26	.74
70 自分の中にある嫌なものを、他の人の中に投げ入れて、その人を悪者にする空想をすることがある	1.8	.35	.73

表5

日常的な分割投影尺度短縮8項目版  $\alpha = .66$

	全体との相関	削除した時の $\alpha$
114 身内にはわがままだが、外では好人物で通っている	.43	.61
44 先週言ったことと反対のことを言うことがある	.35	.63
47 家の外と内とは、見せている性格が違う	.36	.63
64 一人だけでなく、複数の異性に関心をむける	.37	.62
55 ある異性をはじめ理想化していて、その後しばらくすると幻滅することがしばしばある	.38	.62
63 悪いことは人のせいにしてがちである	.39	.62
68 ある人のようになりたいたいと思って、その人になりきってみることがある	.21	.67
70 自分の中にある嫌なものを、他の人の中に投げ入れて、その人を悪者にする空想をすることがある	.34	.63

表6

尺度間の関係

	解離16項目	解離6項目	空想4項目	分割投影17項目	分割投影8項目
解離16項目	1	.86	.28	.59	.59
解離6項目		1	.21	.38	.37
空想4項目			1	.35	.31
分割投影17項目				1	.91

## 尺度間の関係

尺度間の関係を見ると、表6のとおり原版と短縮版は、解離で.86、分割投影で.91という高い相関を示した。

日常的な解離尺度は、日常的な分割投影尺度と.56という高い相関を示した。このことは、両者の高い類似性を示している。また、日常的な解離尺度と空想対話尺度は.28の相関を示した一方、日常的な分割投影尺度と健康な空想対話尺度は.35の高い相関を示した。空想対話尺度が、解離よりも分割投影と高い相関を示したということは、健忘を主体とした解離機制とともに、分割投影的な心理機制に、空想の源泉としての機能があるということであろう。

## 考察

解離と分割についての歴史的変遷を振り返り、解離の外発的外傷的側面のみならず、その創造的側面に注目する必要性を確認した。解離は、垂直分割とも共通性が高いものの、内的な分割として、対象との投影、取り入れの繰り返しであるスプリッティング（分割）とは区別して考えることができる。しかし、これらは関連が強く、尺度間にも高い相関が見られた。さらに、空想対話尺度との関連を見ると、ともに高い相関が見られるものの、分割投影尺度の空想力とのかかわりが注目された。今後、DES、ミロン境界性尺度との関連を見ることでこれらの尺度の妥当性を検証するとともに、文化状況と関連して解離、分割を解明してゆくことが課題であろう。

注1 自我は、フロイトの構造論によってそれまでの意味との断絶が発生した。1923年までの自我は、自己と読みかえることができる。自我と自己は、ハルトマン以降明確に区別されるようになった。（もちろん、ユングはそれ以前に区別している）。

## 謝 辞

本研究に熱心に協力いただいた中村研究室学生、舩田亮太、實藤綾、稲田聖子、古賀由衣、土江香織、豊倉礼子の各氏、本稿を御校閲くださった九州大学大学院教授 北山修先生に心より御礼申し上げます。

## 引用文献

American Psychiatric Association, 1993.

Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fourth edition. Washington, DC.

Bion, W. 1967 Second thoughts, Heinemann, London pp93-109

Ellenberger, Henri F. 1970, The discovery of the unconscious, The history and evolution of dynamic psychiatry 木村敏, 中井久夫監訳, 無意識の発見 上 力動精神医学発達史 弘文堂 1980

Freud, S. 1894 Der Abwehr-Neuropsychosen 井村恒郎, 小此木啓吾訳 防衛—神経精神病フロイト著作集6

Freud, S. 自我論・不安本能論 (1894~1937) フロイト著作集6 人文書院

Freud, S. 1933 古澤平作訳 続精神分析入門 フロイト選集 3 118 日本教文社 1953

Harman, J. L. 心的外傷と回復 中井久夫訳 みすず書房 1999

Hartmann, H. 1950 Comments on the psychoanalytic theory of the ego. The Psychoanalytic study of the Child 5: 74-96, Int Univ. Press, New York.

Heimann 1950 On countertransference, Int J Psycho-Anal, 31

Hilgard, E. R. 1984, Divided consciousness: Multiple controls in human thought and action, expanded edition. New York, Wiley

Hinshelwood R.D. 1989 "A dictionary of Kleinian Thought" Free Association Books 井沢功一朗, 大野裕, 浅井昌弘, 小此木啓吾 1995 ミロン臨床多軸目録「境界性スケール短縮版の構成とその妥当性・信頼性の検証 季刊精神科診断学 6 (4), 473-483

井沢功一朗 1997 DSM-IV第I軸障害と重複する境界性人格障害諸症状の検討 心理臨床学研究 14-4 393-402

James, W. 1902, The varieties of religious experience: A study in human nature. New York, Signet, 1958

Janet, P. 1989 L'automatisme psychologique Essai de psychologie expérimentale sur les formes inférieures de l'activité humaine, 1re édition, Paris, Félix Alcan

Janet, P. 1901, The mental state of hystericals: A study of mental stigmata and mental accidents.

- Janet, P. 1910 *Les Névrose* Paris, Ernest Flammarion, 高橋徹訳 神経症 医学書院 1974
- Janet, P. 1930 In Murchison (Ed.) *History of psychology in autobiography*, Vol. 1. 119-134
- Jung, C. G. 1928-29 1984 *Dream Analysis (Seminar)*, 入江良三訳 夢分析1 ユング クレクション13 人文書院
- 菊池清美 2000 多重人格障害と診断される女性のロールシャッハテスト-解離して派生した人格のロールシャッハテストと解離を孕んだ人格のロールシャッハテスト- 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集 p143
- 菊池清美 2002 ある解離性同一性障害女性の人格統合プロセス-心理面接経過と3回のロールシャッハテストの変化 日本心理臨床学会第21回大会発表論文集 p165
- 北山修 2002 私信
- メラニー・クライン 1946-1955 妄想的分裂の世界
- メラニー・クライン/松本善男訳 1957 羨望と感謝
- Kohut, Heinz 1984 *How does analysis cure?* The university of Chicago Press 本城秀次, 笠原嘉監訳 自己の治癒 みずず書房 1995
- Lifton 1980 *Concept of the Survivor*, in, *Survivors, Victims, and Perpetrators: Essays on the Nazi Holocaust*, ed. J. E. Dimsdale (New York, Hemisphere, 113-26
- Ludwig, A. M. 1983, *The psychobiological functions of dissociation*. *American Journal of Clinical Hypnosis* 26: 93-99
- Lynn, S. J., J. W. Rhue, and J. P. Green 1988 *Multiple personality and fantasy proneness: Is there an association or dissociation*. *British Journal of Experimental and Clinical Hypnosis* 5:138-142
- 村上仁 荻野恒一 1965 ジャネ 異常心理学講座10 みずず書房
- 中村 俊哉 1995 幻覚 現代性教育・性科学事典編纂委員会(福島章ほか)編 現代性教育・性科学事典
- 大住誠 2002 解離性障害の女子中学生への箱庭療法-セラピストの想像活動と治癒機転をめぐって- 日本心理臨床学会第21回大会発表論文集 p240
- Ogden, T., 1979, *On projective identification*, *Int. J. Psycho-Anal*, 60:357
- 岡野憲一郎 1995 外傷性精神障害 岩崎学術出版 2000
- Prince, M. 1927, *Suggestive repersonalization*. *Archives of Neurology and Psychiatry* 18: 159-189
- Putnam, Frank W. 1989 *Diagnosis and treatment of multiple personality disorder*. Guilford Press, 安克昌, 中井久夫訳 多重人格性障害-その診断と治療-岩崎学術出版
- Putnam, Frank W. 1997 *Dissociation in children and adolescents, A developmental perspective*, The Guilford Press, New York, London. 中井久夫訳 解離 若年期における病理と治療 みずず書房 2001
- Segal, H. 1964, *The curative factors in psycho-analysis*. In, *The work of Hanna Segal*. Jason Aronson, New York, 1981 松木邦裕訳 精神分析での治癒因子, クライン派の臨床, 岩崎学術出版社 1988
- Shearer, S. L. 1994, *Dissociative phenomena in women with borderline personality disorder*. *American Journal of Psychiatry* 151(9): 1324-1328
- Shengold, *Soul Murder*, 26
- Spillius, Bott Melanie Klein Today, Vol1, 松木邦裕監訳 1993 メラニークライントウ デイ① 岩崎学術出版
- 坪井裕子 2002 ネグレクトにより児童養護施設に入所した女児のプレイセラピー -いじめられやすい女の子の事例- 日本心理臨床学会第21回大会発表論文集 p186
- Waller, N.G., F. W. Putnam, and E. B. Carlson, 1996, *Types of dissociation and dissociative types*. *Psychological Methods* 1; 300-321
- West, L.J. 1967, *Dissociative reaction*. In A.M. Freedman and H. I. Kaplan (eds.), *Comprehensive textbook of psychiatry*, second edition. (パトナム)
- Wilson, S. C., and T. X. Barber 1983, *The fantasy-prone personality: Implication for understanding imagery, hypnosis, and parapsychological phenomena*. *Imagery: Current theory, research, and application*. New York, Wiley. 340-387
- Winnicott 1966

吉田稔 7年間におよんだ全生活史健忘の一例—  
描画に表現された心的外傷と解離について—  
日本心理臨床学会第21回大会発表論文集  
p201